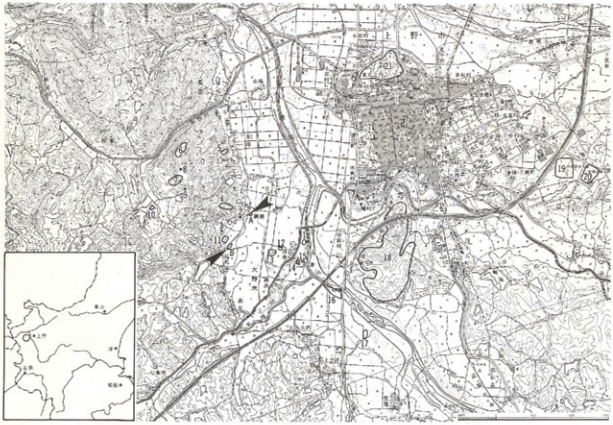
昭和53年度県営圃場整備事業地域
埋蔵文化財調査報告 1

上野市朝屋　内屋敷遺跡
上野市大野木　北山遺跡



内屋敷(A)・北山(B)遺跡位置図（国土地理院1：25000 上野・島ヶ原・月ヶ瀬・伊勢路）

1979・3

三重県教育委員会

Ⅰ 前　　言

三重県教育委員会文化課においては、この数年来、年度当初において、県庁内の各事業実施部課に対し、事業計画を照会し、その事業実施計画地内の埋蔵文化財の保護につとめてきた。

県農林水産部耕地課に対しても昭和53年４月７日に照会し、その回答を５月９日に得た。その中で、県営圃場整備事業計画上野市西部地区計画地内の埋蔵文化財の分布調査を実施したのは５月下旬であった。その結果、朝屋地内Ｄ工区の最西部にあたる畑地を中心にして須恵器、土師器、瓦器等の土器片が散布していることを確認した。また、大野木地内Ｆ工区においてはその南西隅部分にあたる水田を中心とした所から同じような土器片を採集した。これらの遺跡は新発見であったので、それぞれ所在地の小字名をとって内屋敷遺跡(Ａ)、北山遺跡(Ｂ)として県遺跡台帳に登録した。

この結果にもとづいて、県農林水産部耕地第二課、上野耕地事務所、県教育委員会文化課で両遺跡の取扱いについて協議し、試掘調査を行なうことになった。

内屋敷遺跡の試掘調査は昭和53年12月22日に行なった。２×４ｍの大きさの試掘坑を畑地に２箇所、周囲の水田に２箇所入れた結果、畑地の２箇所の試掘坑からはいずれも土師器小皿、すい鉢等の土器片が出土し、表土下約30㎝では溝址を検出した。また、周囲の水田に入れた試掘坑からは遺構、遺物ともに検出できなかった。この結果にもとづいて当日現地で上野耕地事務所と県教育委員会文化課において再度協議を重ねたが、当該地は工事設計上当初計画通り１ｍの地盤を削平するため、畑地部分約140㎡について本調査を行なうことになった。本調査は、三重県教育委

遺跡遠景（矢印右 内屋敷遺跡、左 北山遺跡　南東上空より）

員会が主体となり、上野耕地事務所、地元土地改良区、朝屋地区の方々の協力を得て、昭和54年1月22日から同月27日にわたって行なった。

北山遺跡については、当初、昭和53年度の工事計画地に入らないとの事であったが、再度計画図面と照合した結果、F工区の最南西隅部に位置していることが判明した為、急拠昭和54年1月12日に試掘調査を実施したものである。

試掘調査は、遺跡範囲内の水田に、県道に直交する3本の試掘溝を入れることによって行なった。幅2m、長さ7～9mの細長い試掘溝で、計50m²にわたって実施した。遺物は、最南部に入れた試掘溝を中心に、須恵器、土師器、瓦器等の土器片が出土し、その出土量は北の試掘溝ほど少ない。遺構については最北部の試掘溝で数箇所の柱穴を検出したのみであった。遺構は、表土下約60cmから検出された。当該地は工事設計上約70cmの削平がなされるため、再度協議の結果やむおえず本調査を行なうことになった。

又、遺跡の最南部を排水路が通る為、2月3日に工事立合を行なった。出土遺物は須恵器、土師器、瓦器等の土器片が約10点にとどまった。遺構は検出できなかった。層序は、第1層の水田耕作土から第6層の黄褐色粘質土（地山）まで、試掘時の層序と基本的に同じであることを確認した。ただ、試掘時には約60cmで地山に達したが、この地点では約80cmあった。又、遺物を含まない層として、第7層が砂層、第8層は礫層、第9層は表土下約1.3mで青灰色シルト層となることを確認した。

本調査は、内屋敷遺跡にひき続いて、三重県教育委員会が主体となり、上野耕地事務所、地元土地改良区、大野木地区の方々の協力を得て、2月15日より同月27日にわたり実施した。

II　位置・地形

上野市の市街地を右手にみながら北流する一級河川木津川は、青山高原、鬘ヶ岳、尼ヶ岳などの山なみにその源を発し、伊賀盆地を横断する。久米川と合流する地点においては、幅約1.5kmの沖積地を形成する。

内屋敷遺跡は木津川左岸の丘陵端部の微高地上に位置し、朝屋の集落も同一微高地上にあり、丘陵に沿って形成されている。上野の市街地より西南西約2.5kmの位置にあたり、標高は 145m前後である。地目は畑地で、周囲の水田との比高は1～2mある。この水田は木津川まで続き、広大な水田地帯を形成している。地籍は、上野市大字朝屋字内屋敷771に属する。

北山遺跡は、内屋敷遺跡より南西約500mに位置し、池尻の集落の北端にあたる水田に位置する。県道をはさんだ北の水田は一帯がすでに圃場整備が終了している。標高は151m前後で、周囲の水田との比高は0.5～1mある。行政的には上野市大字大野木字北山に属する。

両遺跡の周辺には少なからずの遺跡が分布している。以下時代順に概観〔基準を北山遺跡(B)におく〕してみたい。

先ず縄文時代の遺跡として、東方約1kmには清水北遺跡(1)が所在している。昭和50年に木津

川改修に伴なって発掘調査され、縄文時代後期の遺構が検出され、土器も出土している。

弥生時代では、後期の遺跡として、方形周溝墓を検出した山ノ川遺跡(17)が、南東約2㎞に所在する。

古墳時代では、水田址を検出した北堀池遺跡(16)が南東約1.5㎞の木津川左岸に所在する。昭和52年より発掘調査が継続されており、現在までに弥生時代後期末、古墳時代前期、後期の竪穴住居址が多数検出され、水田址の検出ともあわせて古代集落のようすを知る上で貴重な資料となっている。

古墳時代後期になると沖積地を見おろす丘陵地に小円墳を中心にした群集墳が築成されるようになる。当遺跡と北西約1.5㎞を走る163号線にはさまれた丘陵地に築成された竜王子塚古墳(2)、馬塚古墳(3)、池ノ側古墳群(4)、権平古墳群(5)、塚の山古墳群(6)、比自山古墳群(7)、天田久保1号墳(8)、同2号墳(9)等がそれである。また、木津川と久米川にはさまれた丘陵には、久米山古墳群(18)として数10基の円墳が確認されており、一部が昭和51年から昭和52年にかけて発掘調査された。伊賀には県下でも初現的な前方後円墳である石山古墳等が所在するが、この地域には4世紀代の古式古墳はみられない。

こうした時代に使用された日常雑器である須恵器の生産址も、北北西約1㎞の山林に所在している。雨田久保古窯址(10)がそれである。

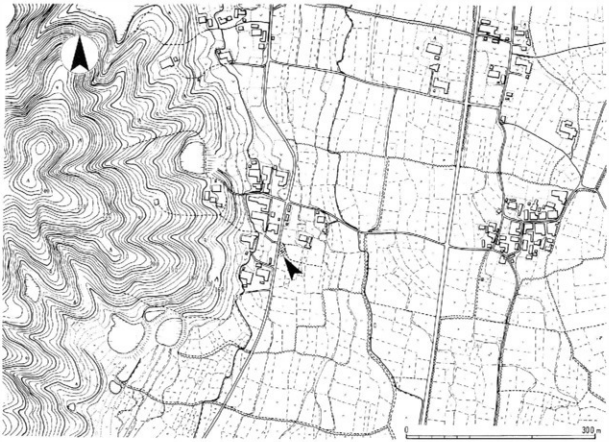
奈良時代になると諸国に国分寺が建立されるが、久米山の東方には伊賀国分寺(17)が所在し、すぐ東隣りには長楽山廃寺(20)が所在する。北山遺跡はこうした時代の集落址と考えられる。

中世になるといくつかの城館址が知られている。この地域でも清水の集落を中心に、神ノ木館址(12)、竹島氏館址(13)、直居氏館址(14)、清水北館址(15)などで、当遺跡より北西100mには田上兵庫館址(11)が所在する。内屋敷遺跡はこうした時代を背景にした遺跡と思われる。

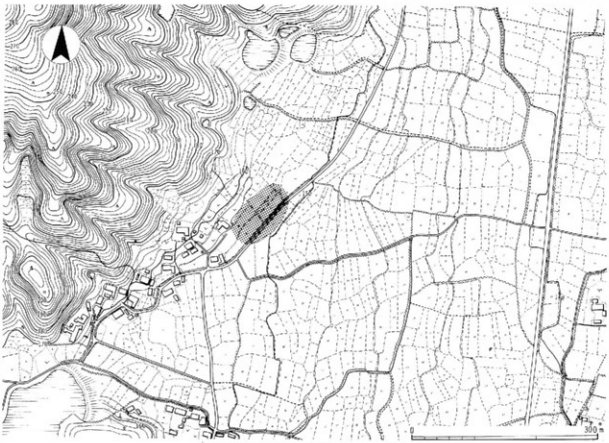
近世になると上野城(21)を中心にした城下町が発達する。

内屋敷遺跡近景（南東から）

北山遺跡近景（南から）



内屋敷遺跡位置図（1：6000）
（県営圃場整備事業上野西部地区現況計画平面図その2　1:3000）



北山遺跡位置図（網目）（1：6000）
（県営圃場整備事業上野西部地区現況計画平面図その2　1:3000）

内屋敷遺跡発掘区平面図（1：2000）

北山遺跡発掘区平面図（1：2000）

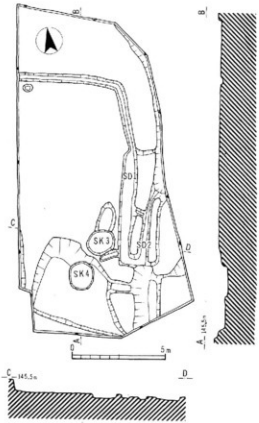
Ⅲ　内屋敷遺跡

(1) 遺　構

僅か140m²の小規模な発掘調査であったが、溝址と土坑を検出することができた。ただ、遺構から出土した遺物が全くなく、時期は不明である。遺構はほぼ平坦な面で検出することができたが、南部に大きなおちこみがある。また、東部は急に傾斜する。

層序は、第1層として畑地耕作上が20～30cmあり、第2層に明るい灰色の砂質土が10cm続き、第3層に暗茶褐色砂質の遺物包含層、第4層に黄褐色砂質の地山となるのが基本的な層序である。ただ発掘調査区中央部では第3層の遺物包含層がなく、南部のおちこみでは、第3層が黄茶色砂質土、第4層が暗茶色粘質土、第5層が暗灰色粘質土となる。

ＳＤＩ　調査区北部から東にむかい、さらに南へ続くＬ字状の溝址である。幅40cm、深さ15～20



内屋敷遺跡遺構実測図（1：200）

発掘区全景（北より）

SD1、SD2、SK3、SK4（西より）

cm。東辺中央で広くなり、幅70～90cm、深さ35cmとなる。

ＳＤ２　ＳＤ１と東辺部中央で平行して走る溝である。幅30～50cm、深さ15cm。

ＳＫ３　調査区南部、ＳＤ１の西側で検出された土坑である。円形を呈し、径1.3m×1.5m、深さ30cm。

ＳＫ４　調査区南部のおちこみから検出された土坑である。径1.3m×1.5mの円形を呈し、深さ20～30cm。

(2) 遺　物

遺物は発掘区各所から整理箱２箱程度出土している。そのほとんどが土器で、僅かに土製品が１点ある。石製品、鉄製品、木製品などは全くない。また遺構から出土したものも全くない。

古墳時代後期の土器

―須 恵 器―

杯蓋（１）　口径12cm、器高4.5cm。天井部は3/4以上がヘラ削りされている。天井部と口縁部の境界は突出して鋭い稜をなす。稜線部の径と口径は同じくらいで、口縁部は高さ2.5cm。端部は鋭い。

杯身（２～３）　２は口径10.4cm、器高4.4cm。たちあがりはほとんど垂直にたちあがり、高さは２cm。受部はほぼ水平にのび、立ちあがりとの境界に沈線がめぐる。体部、底部の大部分がヘラ削りされている。３は口径11.4cm、器高4.5cm。たちあがりはやや内傾し、高さは２cmに満たない。端部は内傾し、鋭い。受部は短かくほぼ水平にひきだされる。２と３は２が蓋になって一括で出土したが、意図的な埋置のようすはうかがえない。

室町時代の土器

―土 師 器―

小皿（４～６）　口径８cm～8.4cm、器高1.2cm～1.9cm。４と６の口縁部がやや肥厚するのに対して５は薄く鋭い端部をもつ。６は平坦な底部と口縁部の境界が、指のおさえつけによって段状をなす。４は口縁部外側をナデつけによって面とりをしている。指圧痕もよくのこる。

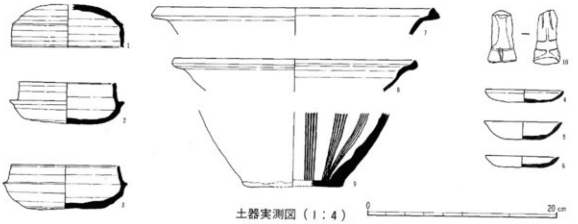
鍋（７、８）　７は口径30.6cm、８は26cm。口縁端部は内側に折り曲げられ、断面三角形を呈する。煤が全面につく。

—伊 賀 焼—

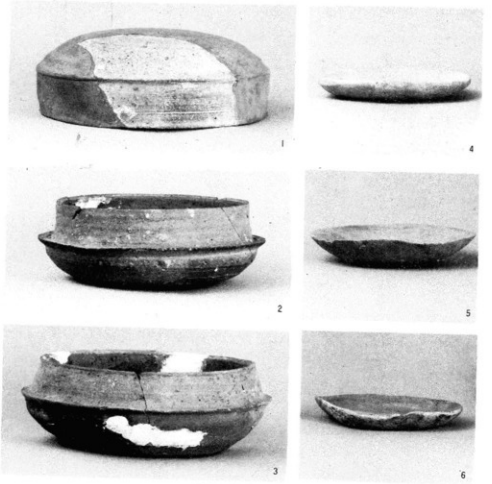
すり鉢（９）　底部径11cm。口縁部の形状は不明。５条単位のすり目がつく。胎土に小石を多くふくむ。赤茶褐色を呈する。

時期不明の土製品

土師質獣足（10）　脚部のみの出土で全体の形状は不明。現存5.5cm。ヘラきざみによって爪を模している。裏面に指圧痕がのこる。



土器実測図（１：４）



土器写真（１：２）

Ⅳ 北 山 遺 跡

(1) 遺　構

試掘調査の際、北部試掘溝で数箇所の柱穴を検出したにすぎなかったが、今回の本調査では多数の遺構を検出することができた。

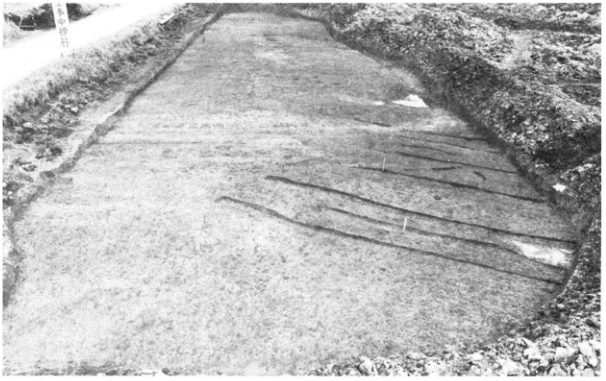
検出された遺構は、奈良時代の溝址群１、土坑１、時期不明の溝址群２、柱穴多数である。遺構は中央部にはなく、北部と南部に集中する。地山面が東にむけて徐々にさがる。南部で検出した溝址群は調査区外へ続くが、周辺部と思われる。

層序は第１層に濁灰色の水田耕作土が約20cmばかりあり、第２層に青灰色粘質土が５cm、第３層は明灰色砂質土が10cm、第４層は黄灰色粘質土が10cm、第５層に明灰褐色粘質土が10～20cmと続き、第６層が暗茶褐色粘質の遺物包含層が20cmある。地山は黄褐色粘質土である。遺構はこの地山面まで掘り下げることによって検出することができた。

奈良時代の遺構

ＳＤＩ　調査区南部東辺で検出された溝址群である。８条からなり、平行してほぼ南北に走る。幅30～40cm、深さ10～15cm。遺物の量は少なく、全く出土しない溝址もあった。埋土は暗茶褐色粘質土。

ＳＫ４　調査区中央北寄りで検出された土坑である。2.7ｍ×3.2ｍのだ円形を呈する。深さ20～30cm。遺物の量は少なく、埋土は暗茶褐色粘質土であった。



発掘区全景（南より）

SD1（西より）

時期不明の遺構

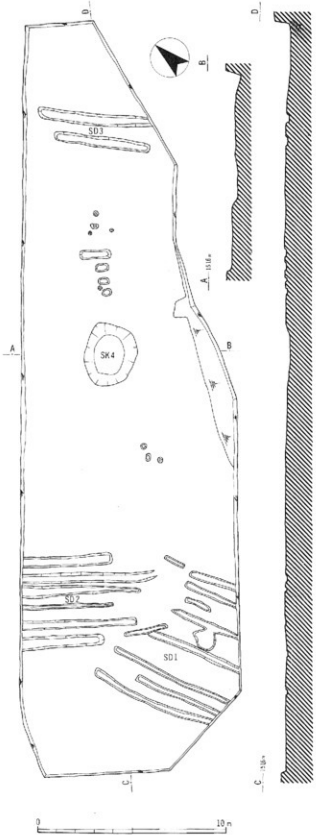
ＳＤ２　調査区南部西辺で検出された溝址群である。６条からなり、地山面の傾斜に沿って走る。幅20～60㎝、深さ５～15㎝。埋土は灰色砂質で、遺物は全く包まれていなかった。切り合い関係でＳＤ１より新しいことがわかった。

ＳＤ３　調査区北部で検出された溝址群で２条からなる。ＳＤ２とほぼ平行に走る。幅50～60㎝、深さ10㎝。ＳＤ２と同じく灰色砂質土が埋土で遺物は全く含まれていない。

その他柱穴が多数検出されたが、掘立柱建物址のように整然と配列されるものはなかった。

(2)　遺　　物

出土した遺物は整理箱５箱程度である。遺物のすべてが土器で、石製品、鉄製品、木製品等は全くない。遺物は南部で多く、北部へいくにつれて出土量は少なくなる。出土した土器は土師器（皿、甕など）、須恵器（杯蓋、杯身、瓶、甕、長頸壺など）、瓦器(椀など)、青磁(椀)、近世陶器等である。いずれも小片ばかりで図化するほどのものはない。



北山遺跡遺構実測図（１:200）

須恵器は杯蓋と杯身で特徴がわかる部分が出土している。蓋は宝珠形つまみをもつものがほとんどで、平坦な天井部で口縁端部は短かく下方へ屈曲するものがほとんどである。身は短かく垂直におりるか、若干外へひらく高台をもつものがほとんどである。

青磁片は4点出土している。そのうち3片が淡青色を呈し、他の1片は濃緑色を呈する。淡青色の1片は外表に花弁が施され、弁中央がもりあがる。

V 結　　語

内屋敷遺跡、北山遺跡はともに小規模で限られた地区だけの発掘調査であったが、いくつかの成果を得ることができた。

内屋敷遺跡の発掘調査では古式須恵器が出土した。「陶邑古窯址群Ⅰ」[①]の編年でいうＴＫ23の杯に比定できる。県下では久居古窯址[②]が古式須恵器の古窯址として知られているが、伊賀地域ではこの時期の古窯址は確認されていない。

内屋敷遺跡はその出土遺物から室町時代の遺跡と考えられるが、その性格は解明できなかった。

北山遺跡から出土した須恵器杯は前述の編年でＭＴ21、ＴＫ７に比定されること、出土遺物の内容から、掘立柱建物址などを検出してはいないが、奈良時代の集落址の周辺部と考えられる。

今回発掘調査された内屋敷、北山両遺跡は県営圃場整備事業にともなう事前の分布調査で新しく発見された遺跡である。両遺跡の周囲では北堀池遺跡の発掘調査によって弥生時代末から古墳時代の集落についていくつかの点が解明されつつあるが、両遺跡が所在する徴高地から木津川にかけての沖積地に遺物散布地が知られていない。北西の丘陵一帯に築造されている群集墳の所在を考えあわせても分布調査の重要性を痛感する。

（早川裕己）

〈注〉

①田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古クラブ　1966年

②小玉道明・山沢義貴「久居古窯址群発掘調査報告―２号窯、４号窯―」久居古窯址群発掘調査団　1968年